校異源氏物語・こうはい

その比按察大納言ときこゆるは故致仕のおとゝの次郎なりうせ給にし右衛門督のさしつきよわらはよりらう　くしうはなやかなる心はへものし給し人にて成のほりたまふ年月にそへてまいていとよにあるかひありあらまほしうもてなし御おほえいとやむことなかりける北の方ふたり物し給ひしをもとよりのはなくなり給ていまものし給は後のおほきおとゝの御むすめまきはしらはなれかたくしたまひしきみを式部卿の宮にて故兵部卿のみこにあはせたてまつり給へりしを御子うせ給て後しのひつゝかよひ給しかと年月ふれはえさしもはゝかり給はぬなめり御子はこ北のかたの御はらに二人のみそおはしけれはさう　くしとて神仏にいのりていまの御はらにそおとこ君ひとりまうけ給へるこ宮の御かたに女きみひとゝころおはすへたてわかすいつれをもおなしことおもひきこえかはし給へるををの　く御かたの人なとはうるはしうもあらぬこゝろはへうちましりなまくね　くしきこともいてくる時ゝあれと北の方いとはれ　くしくいまめきたる人にてつみなくとりなし我御かたさまにくるしかるへきことをもなたらかにきゝなしおもひなをし給へはきゝにくからてめやすかりけり君たちおなしほとにすき　くおとなひ給ぬれは御裳なときせたてまつり給七間のしむてんひろくおほきにつくりて南おもてに大納言殿おほいきみ西に中の君ひんかしに宮の御かたとすませたてまつり給へりおほかたにうちおもふ程はちゝ宮のおはせぬ心くるしきやうなれとこなたかなたの御たから物おほくなとしてうち　くのきしきありさまなと心にくゝけたかくなともてなしてけはひあらまほしくおはすれいのかくかしつき給きこえありてつき　くにしたかひつゝきこえ給人おほくうち春宮より御けしきあれと内には中宮おはしますいかはかりの人かはかの御けはひにならひきこえむさりとておもひをとりひけせんもかひなかるへし春宮には右大臣殿のならふ人なけにてさふらひ給はきしろひにくけれとさのみいひてやは人にまさらむとおもふ女こを宮つかへにおもひたえてはなにのほいかはあらむとおほしたちてまいらせたてまつり給ふ十七八のほとにてうつくしうにほひおほかるかたちし給へり中の君もうちすかひてあてになまめかしうすみたるさまはまさりてをかしうおはすめれはたゝ人にてはあたらしくみせまうき

御さまを兵部卿の宮のさもおほしたらはなとおほしたる此わか君をうちにてなとみつけ給ふ時はめしまとはしたはふれかたきにし給心はへありておくおしはからるゝまみひたいつき也せうとをみてのみはえやましと大納言に申せよなとの給かくるをさなむときこゆれはうちゑみていとかひありとおほしたり人におとらむ宮つかひよりは此宮にこそはよろしからむをんなこはみせたてまつらまほしけれ心ゆくにまかせてかしつきてみたてまつらんにいのちのひぬへき宮の御さまなりとの給ひなからまつ春宮の御ことをいそき給てかすかのかみの御ことはりも我よにやもしいてきて故おとゝの院の女御の御ことをむねいたくおほしてやみにしなくさめのこともあらなむとこゝろのうちにいのりてまいらせたてまつり給ついとゝきめき給よし人ゝきこゆかゝる御ましらひのなれ給はぬほとにはか　くしき御うしろみなくてはいかゝとて北のかたそひてさふらひ給はまことにかきりもなくおもひかしつきうしろみきこえ給殿はつれ　くなる心地して西の御かたはひとつにならひ給ていとさう　くしくなかめ給ひんかしの姫君もうと　くしくかたみにもてなし給はてよる　くはひとゝころに御とのこもりよろつの御ことならひはかなき御あそひわさをも此方を師のやうにおもひきこそてそ誰もならひあそひ給ける物はちを世のつねならすし給て母北のかたにたにさやかにはおさ　くさしむかひたてまつり給はすかたはなるまてもてなし給物から心はへけはひのむもれたるさまならすあい行つき給へることはた人よりすくれ給へりかくうちまいりやなにやと我かたさまをのみおもひいそくやうなるも心くるしなとおほしてさるへからむさまにおほしさためての給へおなしことゝこそはつかうまつらめとはゝ君にもきこえ給けれとさらにさやうのよつきたるさまおもひたつへきにもあらぬけしきなれは中　くならむ事は心くるしかるへし御すくせにまかせてよにあらむかきりはみたてまつらむのちそ哀にうしろめたけれとよをそむくかたにてもをのつから人わらへにあはつけきことなくて過し給はなんなとうちなきて御心はせのおもふやうなることをそきこえ給いつれもわかす親かり給へと御かたちをみはやとゆかしうおほしてかくれ給こそ心うけれとうらみて人しれすみえたまひぬへしやとのそきありき給へとたえてかたそはをたにえみたてまつり給はすうへおはせぬほとはたちかはりてまいりくへきをうと　くしくおほしわくる御けしきなれは心うくこそなときこえみすのまへにゐ給へは御いらへなとほのかにきこえ給御こゑけはひなとあてにをかしうさまかたちおもひやられて哀におほゆる人の御ありさまなりわか御姫君たちを人におとらしと思おこれと此君にえしもまさらすやあらむかゝれはこそ

世中のひろきうちはわつらはしけれたくひあらしと思にまさるかたもをのつからありぬへかめりなといとゝいふかしう思きこえ給月比なにとなく物さはかしき程に御ことのねをたにうけたまはらてひさしう成はへりにけりにしのかたに侍る人はひわをこゝろに入て侍るさもまねひとりつへくやおほえ侍らんなまかたほにしたるにきゝにくき物のねから也おなしくは御心とゝめてをしへさせ給へおきなはとりたてゝならふ物侍らさりしかとそのかみさかりなりしよにあそひ侍しちからにやきゝしるはかりのわきまへはなにことにもいとつきなうははへらさりしをうちとけてもあそはさねと時〻うけ給御ひはのねなむ昔おほえ侍る故六条院の御つたへにて右のおとゝなんこの比よにのこり給へる源中納言兵部卿の宮なに事にもむかしの人におとるましういと契ことに物し給人〻にてあそひのかたはとりわきて心とゝめたまへるをてつかひすこしなよひたるはちをとなとなんおとゝにはをよひ給はすと思ふ給ふるを此御ことのねこそいとよくおほえ給へれひはゝおしてしつやかなるをよきにする物なるにちうさすほとはちをとのさまかはりてなまめかしうきこえたるをんなの御ことにて中　くをかしかりけるいてあそはさんや御こと まいれとの給女房なとはかくれたてまつるもおさ　くなしいとわかき上臘たつかみえたてまつらしと思はしも心にまかせてゐたれはさふらふ人さへかくもてなすかやすからぬとはらたち給わか君うちへまいらむとゝのひすかたにてまいり給へるわさとうるはしきみつらよりもいとをかしくみえていみしうゝつくしとおほしたり麗景殿に御ことつけきこえ給ゆつりきこえてこよひもえまいるましくなやましくなときこえよとの給てふえすこしつかうまつれともすれは御前の御あそひにめしいてらるゝかたはらいたしやまたいとわかきふえをとうちゑみてそうてうふかせ給いとをかしうふい給へはけしうはあらす成ゆくは此わたりにてをのつから物にあはするけなり猶かきあはせさせ給へとせめきこえ給へはくるしとおほしたるけしきなからつまひきにいとよくあはせてたゝすこしかきならい給かはふえふつゝかになれたるこゑして此ひんかしのつまに軒ちかき紅梅のいとをもしろくにほひたるをみ給ておまへのはな心はへありてみゆめり兵部卿宮うちにおはすなりひとえたおりてまいれしる人そしるとてあはれひかる源氏といはゆる御さかりの大将なとにおはせし比わらはにてかやうにてましらひなれきこえしこそよとゝもに恋しう侍れこの宮たちを世人もいとことにおもひきこえけに人にめてられんとなり給へる御ありさまなれとはしかはしにもおほえ給はぬは猶たくひあらしとおもひきこえし心のなしにやありけんおほかたにて思いてたてまつるにむねあくよなく

かなしきをけちかき人のおくれたてまつりていきめくらふはおほろけのいのちなかさなりかしとこそおほえはへれなときこえいてたまひて物あはれにすこく思ひめくらしゝほれ給ついての忍かたきにや花おらせていそきまいらせ給ふいかゝはせんむかしの恋しき御かたみにはこの宮はかりこそはほとけのかくれたまひけむ御名こりにはあなんか光はなちけんをふたゝひいて給へるかとうたかふさかしきひしりのありけるをやみにまとふはるけところにきこえをかさむかしとて

こゝろありて風のにほはすそのゝ梅にまつ鴬のとはすやあるへきとくれなひのかみにわかやきかきてこのきみのふところかみにとりませおしたゝみていたしたてたまふをおさなきこゝろにいとなれきこえまほしとおもへはいそきまいりたまひぬ中宮のうへの御つほねより御とのゐところにいて給ほとなり殿上人あまた御をくりにまいる中にみつけ給てきのふはなといとゝくはまかてにしいつまいりつるそなとの給ふとくまかて侍にしくやしさにまたうちにおはしますと人の申つれはいそきまいりつるやとおさなけなるものからなれきこゆうちならて心やすき所にも時ゝはあそへかしわかき人とものそこはかとなくあつまる所そとの給ふこの君めしはなちてかたらひ給へは人ゝはちかうもまいらすまかてちりなとしてしめやかに成ぬれは春宮にはいとますこしゆるされためりないとしけうおほしまとはすめりしをときとられて人わろかめりとの給へはまつはさせ給しこそくるしかりしかおまへにはしもときこえさしてゐたれは我をは人けなしと思ひはなれたるとなことはり也されとやすからすこそふるめかしきおなしすちにてひんかしときこゆなるはあひ思ひ給てんやとしのひてかたらひきこえよなとの給ついてにこの花をたてまつれはうちゑみてうらみて後ならましかはとてうちもをかすこらむすえたのさま花ふさ色もかも世のつねならすそのにゝほへるくれなゐのいろにとられて香なんしろきむめにはおとれるといふめるをいとかしこくとりならへてもさきけるかなとて御心とゝめ給ふ花なれはかひありてもてはやし給こよひはとのゐなめりやかてこなたにをとめしこめつれは春宮にもえまいらす花もはつかしくおもひぬへくかうはしくてけちかくふせ給へるをわかき心地にはたくひなくうれしくなつかしうおもひきこゆ此花のあるしはなと春宮にはうつろひ給はさりししらす心しらむ人になとこそきゝ侍しかなとかたりきこゆ大納言のみ心はへはわかゝたさまに思へかめれときゝあはせ給へとおもふ心はことにしみぬれは此かへりことけさやかにもの給やらすつとめてこの君のまかつるになをさりなるやうにて

花のかにさそはれぬへき身なりせはかせのたよりをすくさましやはさて猶
いまはおきなともにさかしらせさせてしのひやかにとかへす　くの給てこのき
みもひんかしのをはやんことなくむつましう思ましたりなか　くこと方のひめ
君はみえ給なとしてれいのはらからのさまなれとわらは心地にいとおもりかに
あらまほしうおはする心はへをかひあるさまにてみたてまつらはやとおもひあ
りくに春宮の御かたのいと花やかにもてなし給につけておなしことゝは思なか
らいとあかすくちおしけれは此宮をたにけちかくてみたてまつらはやとおもひ
ありくにうれしき花のついてなりこれはきのふの御かへりなれはみせたてまつ
るねたけにもの給へるかなあまりすきたる方にすゝみ給へるをゆるしきこえす
ときゝ給て右のおとゝわれらかみたてまつるにはいと物まめやかに御心をさめ
給ふこそをかしけれあた人とせんにたらひ給へる御さまをしゐてまめたち給は
んもみところすくなくやならましなとしりうこちてけふもまいらせ給ふに又
もとつかのにほへるきみか袖ふれは花もえならぬ名をやちらさむとすき
くしやあなかしことまめやかにきこえたまへりまことにいひなさむとおもふ
ところあるにやとさすかに御心ときめきし給て
花のかをにほはす宿にとめゆかは色にめつとや人のとかめんなと猶心とけ
すいらへ給へるを心やましとおもひゐ給へり北のかたまかてたまひてうちわた
りのことの給ふついてにわか君の一夜とのひしてまかりいてたりしにほひのい
とをかしかりしを人はなをとおもひしを宮のいとおもほしよりて兵部卿のみや
にちかつきゝこえにけりむへ我をはすさめたりとけしきとりえんし給へりしか
こゝに御せうそこやありしさもみえさりしをとの給へはさかし梅の花めて給ふ
きみなれはあなたのつまの紅梅いとさかりにみえしをたゝならておりてたてま
つれたりしなりうつり香はけにこそ心ことなれはれましらひし給はんをんなな
とはさはえしめぬかな源中納言はかうさまにこのましうはたきにほはさて人か
らこそよになけれあやしうさきの世の契いかなりけるむくひにかとゆかしきこ
とにこそあれおなしはなの名なれと梅はおひいてけむねこそ哀なれ此宮なとの
めて給ふさることそかしなと花によそへてもまつかけきこえ給ふ宮の御かたは
物おほししるほとにねひまさり給へれはなにこともみしりきゝとゝめ給はぬに
はあらねと人にみえよつきたらむありさまはさらにとおほしはなれたりよの人
も時による心ありてにやさしむかひたる御かた　くには心をつくしきこえわひ
いまめかしきことおほかれと此方はよろつにつけ物しめやかにひき入給へるを
宮は御ふさひのかたにきゝつたへたまひてふかういかてとおもほしなりにけり

わかきみをつねにまつはしよせ給つゝしのひやかに御文あれと大納言の君ふかく心かけきこえ給てさも思たちての給ことあらはとけしきとり心まうけし給をみるにいとをしうひきたかへてかう思よるへうもあらぬ方にしもなけのことの葉をつくし給ふかひなけなることゝ北方もおほしの給ふはかなき御返りなともなけれはまけしの御心そひておもほしやむへくもあらすなにかは人の御ありさまなとかはさてもみたてまつらまほしうおひさき遠くなとはみえさせ給になと北方おもほしよる時　くあれといたう色めき給てかよひ給ふしのひ所おほく八の宮の姫君にも御心さしのあさからていとしけうまうてありき給たのもしけなき御心のあた　くしさなともいとゝつゝましけれはまめやかにはおもほしたえたるをかたしけなきはかりに忍てはゝ君そたまさかにさかしらかりきこえ給ふ